



Title	女乗物の形態と内装・外装のデザインに関する考察
Author(s)	落合, 里麻
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100287
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

女乗物の形態と内装・外装のデザインに関する考察

落合 里麻 東北生活文化大学

はじめに

江戸時代に用いられた「乗物」は、駕籠の中でも支配者層が使用したものを指し、使用者や身分によって数種が存在した。大名家の奥方や姫君など、位の高い女性が使用したものを「女乗物」と呼び、江戸前期の段階ではほぼ完成形に至っていたと推測される。女乗物の形態の特徴として、屋根の形は唐破風状が多く、前面と両側面に夢想窓が付くものが多い。担ぎ棒の形は円弧状である。

女乗物の種類と現存数

女乗物は外装によって順位が決まっており、好きなものを選んで乗れるわけではなかった。『守貞謾稿』（喜田川守貞著、1853 年に一応完成）には、5 種類が存在したと記される。最上位が黒漆金時絵女乗物、2 番目が天鷲絨巻女乗物、3 番目が朱塗網代女乗物、4 番目が青漆塗女乗物、5 番目は莫座打女乗物である。『守貞謾稿』には書かれないが、5 種類のさらに上位には「惣梨子地に葵紋と蒔絵」の女乗物が存在し、徳川家に限って使用された。女乗物の国内における現存数について、筆者が現段階で把握しているのは約 60 挺である。

女乗物の位置づけの変化

日高真吾の先行研究によると、女乗物は婚礼調度の一つとして作られ、実用的な側面よりも装飾面を優先する性質を持った乗物である¹。一方、男性用の乗物にはこのような装飾性を追及した外装は見られない。また、女乗物は駕籠の中でも特に権威づけられた乗用具であったと言える¹。江戸

初期は婚礼行列の主役は輿だったが、後期になると黒漆金時絵女乗物が輿の代わりを担い、乗用具としての権威が上がっている。このような変化は婚礼行列図から読み取れる。江戸中期の「徳川種姫婚礼行列図」（18 世紀、山本養和筆）では、花嫁（種姫）が輿に乗り、付き従う女性たちが乗物に乗る様子が描かれる。その後、江戸後期に描かれた「福君江戸下向行列図」（19 世紀）では、公家の女性である福君が（輿ではなく）女乗物に乗る様子が描かれる。

女乗物の形態と内装・外装

女乗物は基本的に木製で、強度が必要な部分には金属を使い、丈夫な構造が出来上がる。女乗物のつくりや形態は、順位が異なるものでも大方共通し、外装は順位ごとに決められた仕様となる。筆者が女乗物の実測図を作成し、比較したところ、基本的なつくりや形態は共通するが、微妙に寸法、比率、角度等が異なることがわかった。全く同じ女乗物は存在しないようだ。女乗物の内装は紙本彩色画で彩られることが多い。題材には傾向があり、外装の仕様に合わせて内装も決まっていたと考えられる。屋根は唐破風状が多く、骨組みの上に厚さ 4mm 程度の屋根板を張って曲面が作られる。内部から見上げると骨組みが格天井のように見え、区切られた四角の中に草花の絵が描かれることが多い。構造材によってできた形態を無駄なく活用し、美しくデザインされている。夢想窓は、居室の前面と左右の引戸の 3 箇所に付く連子状の窓である。細長い板を立て並べ、内側の引戸を左

右に引いて開閉する。板の面にも蒔絵などの装飾が施されることが多く、上下に銚金具を付けるデザインが一般的である。銚金具は木部の接合部や先端部のほぼ全てに付く。彫り模様が入り、装飾的な要素が強く見えるが、補強の目的も併せ持つ。

女乗物の内装・外装の特徴を現存例で見る

最上位の黒漆金蒔絵女乗物は、全体を黒漆塗りとし、蒔絵によって外装全体がデザインされる。担ぎ棒、夢想窓、唐破風状の屋根など、形に合わせて装飾が施される。たとえば、葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物（江戸後期、松浦史料博物館蔵）は、幾何学模様の蒔絵で全体を埋め尽くすことで豪華さを出し、その上に家紋を散らすデザインである。このようなデザインは江戸後期に製作されたものに見られる。他の外装デザインの傾向として、江戸後期には黒漆の地塗りに唐草の蒔絵のデザインが主流となり、紋が入ることも多い。女乗物を含めて婚礼調度全体がそのような傾向にあった。山王宮日吉神社（京都府宮津市）の宮司家に伝わる黒漆金蒔絵女乗物はその一例で、外装は唐草に高崎扇の紋を散らしたデザインである（図1）。内部の装飾画は花鳥画が一般的で、背面に松、鶴、亀が描かれることが多い。他に竹、梅、草花、鳥が多く描かれる。



図1 黒漆金蒔絵女乗物（山王宮日吉神社 宮司家蔵）

また、黒漆金蒔絵女乗物の中には、外装に密に蒔絵が施された女乗物がある。竹菱梅葵紋蒔絵女乗物（江戸後期、仙台市博物館蔵）がその例である。木部は部分的に梨子地で仕上げられ、内部には源氏物語が描かれるが、徳川家の「惣梨子地に葵紋と蒔絵」の女乗物には含まれない。黒漆金蒔絵女乗物の一つ上のような位置付けであろうか。他方、同じ黒漆金蒔絵女乗物でも、模様を控えめ

にして家紋の蒔絵を中心としたデザインの女乗物も現存する。水戸家定紋散御乗物（江戸後期、鳥谷先神社蔵）、黒塗六星紋蒔絵女乗物（江戸後期、和歌山市立博物館蔵）がこのタイプであろう。順位2番目の天鷲絨巻女乗物は居室の側面にピロードが貼られ、それ以外は単色の漆塗りで仕上げられる。紺地のピロードが比較的多いが、黒漆塗ピロード貼橘紋女乗物（江戸後期、大通寺蔵）のように、赤紫色の地のピロードの例もある。順位3番目の朱塗網代女乗物は、外装全体が網代で、その上を朱塗りで仕上げる。現存数が少なく、筆者が確認したものは2挺である。木瓜唐花浮線綾朱塗網代女乗物（人吉城歴史館蔵）は、居室下部に金泥で松・竹・梅が描かれる。順位4番目の青漆塗女乗物の「青漆」とは、深い緑色の漆である。福井県には青漆塗の乗物が現存するが、形態が上位の女乗物とやや異なるため、これらが女乗物と言えるか否か、判断が難しい。順位5番目の莫莖打女乗物は現存が確認できない。そのため実際の姿は不明だが、「徳川種姫婚礼行列図」下巻に描かれた乗物がこれに該当する可能性がある。屋根は（唐破風状ではなく）円弧状だが、そのような女乗物が存在した可能性も考えられる。

おわりに

女乗物は順位によって外装の仕様が決まっていたが、形態は概ね共通することがわかってきた。人を乗せて運べるよう緻密に、無駄なく設計され、人が乗り降りする際の動きも考慮されている。実用性よりも装飾面を優先しているとも言えるが、内装・外装は形態を無視することなく、バランスを取りながらデザインされている。中には華やかさが際立つ女乗物もあるが、視覚的な要素と形態のバランスに思考を凝らして作られたことが見て取れる。

註

- 1 日高真吾「女乗物の内部装飾画に関する基礎的調査」民族藝術、2004年、p.171